



軽防協ニュース速報（号外）

2015年2月3日

軽種馬防疫協議会 事務局

(JRA 馬事部防疫課)

ドイツにおける鼻疽の発生について

2015年1月下旬、ニーダーザクセン州オスナブリュック郡のビッペンにおいて、ドイツでは1955年以来となる鼻疽の発生が確認された。ドイツ連邦食糧農業消費者保護省(BMELV)の報告によると、感染馬は、2014年11月26日、輸出目的で鼻疽に関する血液検査が行われ、補体結合試験およびイムノブロット法によって陽性と診断された。同馬は淘汰された後、2015年1月27日に皮膚材料を用いたPCR検査によって確定診断された。

感染馬は、2008年5月に生まれて以降、国外への移動歴はなく、感染源は不明である。臨床症状は認められず、輸出検疫中は他の馬と隔離されていた。当該施設は、血清学的に陽性と診断されて以降直ちに監視下におかれ、施設内にいた31頭の馬については、2週間間隔で3回の検査が実施され陰性が確認されている。

鼻疽は *Burkholderia mallei* を原因とするウマ科動物の細菌性疾病として古くから知られている。人獣共通感染症であり、ラクダ、クマ、オオカミ、イヌにも感染することが明らかとなっている。

ロバやラバでは高熱と呼吸器症状を呈し、数日以内に死亡する急性型が多い。馬では一般的に慢性の経過を辿り、発熱、膿性鼻汁、鼻腔粘膜の結節・潰瘍、皮下リンパ管の念珠状結節・膿瘍・潰瘍などがみられる。

感染動物や汚染物に直接接触することによってヒトにも感染するため、それらを取り扱った場合には厳重な警戒をする必要がある。

鼻疽は法的な検査、感染馬の摘発淘汰および輸入制限により多くの国で撲滅されてきているが、アジア、アフリカ、南アメリカなどで今なお存在している国があり、清浄国に持ち込まれる可能性が指摘されている。